

詩・酒・佛

——狂言綺語観の展開(2)——

中川徳之助

I はじめに

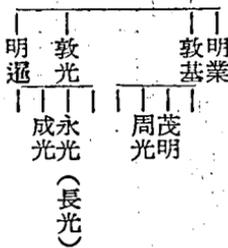
平安時代末期、藤原氏北家の専権にひしがれた文人達は、院政と武士勢力の擡頭とによる貴族社会そのものの退潮にひき込まれて、不遇な生活におしやられていた。ここに、藤原敦光という一文人を中心に、不遇と言われる生活の相と、そこから逃れるために彼等が撰んだ「場」とについて考え、あわせて漢文学における狂言綺語観の展開の跡を辿つてみたい。

藤原敦光を撰んだのは、当時の記録にも「雑筆冠絶当世矣。」(合記)「早筆終功。可謂文之事随手人歟。」(中右記)と記されている有数な文人であり、研究の資料にも恵まれているためである。その点、大江匡房についても考えたいと思つている。

はじめに、その家系と経歴の概畧を記す。

家系

宇合(式家)——葦下齋……六代畧……敦信——明衡



(尊卑分脈による)

紀元	年数	年令	
一〇六三	康平六	1	出生
一〇六六	治暦二	4	明衡歿
一〇九〇	寛治四	28	文章得業生に挙げらる
一〇九四	嘉保元	32	献策、当時六位
一〇九六	永長元	34	凶書助
一〇九八	承德二	36	式部丞に任ず
一一〇二	康和四	40	当時大内記
一一〇七	嘉承二	45	式部少輔をへて、当時文章博士兼大内記趣中介
一一一〇	天永元	48	当時従五位上
一一一一	二	49	当時正五位下
一一一三	永久元	51	大学頭兼文章博士周防権介
一一一四	二	52	従四位下
一一一七	五	55	当時兼伊予権介
一一二〇	保安元	58	従四位上
一一二二	三	60	式部大輔に任ず
一一二三	四	61	兼加賀介
一一二四	天治元	62	兼但馬権守

一一二五	二	63	仙院殿上の籍を許さる
一一三一	天承元	69	正四位下
一一三二	長承元	70	この年より保延三年までの間に内裏昇殿を許さる
一一四四	天授元	82	歿

II 不遇の意識とその誘因

敦光の不遇を歎く詩は数多い。はやく、

除夜独吟

行年三十今宵尽。倚頼身涯足動情。

性嬾才疎官又賤。独慙事事已無成。

(本朝無題詩卷五)

註 以下、本朝無題詩(群書類従所収)よりの引用は巻数のみを以つて示す

の作があるが、こうした思は年々に深まつてゆく。次に、本朝統文粹におさめられている敦光の申文についてその不遇とするところを考えてみたい。

(1) 上啓両箇所望事(保安三・十二・九)

この状は、式部大輔の闕と中弁の闕に補せられることを願つたものである。

敦光為大内記之時。任先例申少弁。頻遇其闕。無遂其望。徒遷他官。空敍四品。其後顧運之至拙慙才之惟疎。年来之間不献申文也。敦光若被用者不可有其限。既用才能徒以淹

沈。愁中之愁。歎中之歎也。

と、功の報いられない不満を述べ、「今生之望在此両官。慮外漏其恩者。有何面目一日經廻世間哉。用与不用在此一挙而已。」と強く所望を訴えている。この月、式部大輔に任ぜられてゐる。

(2) 請殊蒙天恩依式部丞巡第一并儒学奉公勞被兼任紀伊国守闕状(大治五・正・六)

崇徳天皇生誕の元永二年(一一一九)、浴殿読書の儀に、文章博士藤原敦光は藤原実光・中原師遠を率ゝて奉仕した(中宮御産部類など)。その後、実光(北家)は早く昇殿を許され正四位下に敘せられ、師遠もまた榮進したが、敦光は独り恩賞の數に洩れてゐた。天治二年仙洞の殿籍を許されながら、内裏の殿上を許されなことは、実光に思いくらべて、敦光にはとくに不満であつた。

この状は、そうした不満を記し、かつ大輔の勞による加階のかなえられない代償として、紀伊国守の兼任を願つてゐる。

(3) 請殊蒙天恩准先例依当職并儒学奉公勞被叙一階状(大治六・正・四)

この状は、幼少よりの儒学の勞と奉公の功とを述べて、後進に位階・榮誉を先んじられる不満を訴え、一階の叙位を願つたものである。「謗朝恩可期幾春。用捨之間只在此時而已。」と記してゐる。翌五日、臨時の朝恩により正四位下に敘せられた。(長秋記)

(4) 請殊蒙天恩因准先例被兼任參謬中弁闕状(大治六・正・十九)

この状は、保安三年の申文と同様な趣を願つたものである。ここでも、「今成其望之者。皆是懸隔之後進。多又所問之秀才也。」と後進に越えられる不満を洩らしてゐる。

(5) 請殊蒙天恩依当職勞兼任參謬闕状(天承二正・二・十)

この状は、大治三年以来受領に任ぜられない不遇を記して、「檢之先代未聞如此之淹沈者矣。」と訴え、さらに昇殿の願に言い及んで、「嗟乎頽景既傾。餘喘不幾。顯其八座之列可在一瞬之間。伏冀天恩依当職勞被兼任彼闕。將知明時之不棄愚老矣。」と參議に兼任されることを願つたものである。參議兼任の願はかなえられなかつたが、保延三年の状に「名通雲霄之籍。風侍宸遊。」とあり、この後昇殿のことは許されたようである。

(6) 請特蒙天恩依為当省丞巡第一被兼任陸奥守闕状(保延元・六・六)

この状は、受領に任ぜられず、後進に越される不満をくりかえし訴えたものである。

(7)

これは申文としては見られないが、敦光の詩の注に、「齡有六旬。位昇四品。頻漏朝恩。未蒙子息。故云。」(卷八)「年老官尙未蒙一口。故云。」(卷六)などとある。子の推挙が関心事であつた当時であり、こうした憂も敦光の不満を

深めたことであろう。

以上、不遇を歎く言葉によつて、敦光の不遇の意識の生ずる源を探つてゆくと、官位と兼官とによせられる関心がその誘因として大きく浮びあがつてくる。この点について考えてみる。

官位への関心……………「微官猶越朝市裡。」(巻六)

「官猶賤職身將老。」(巻九)など、敦光はしばしば官の微賤を歎き、皇恩の身に及ばないことを恨む。二十五歳にして正二位関白となつた藤原忠通は措くとしても、天永二年十月廿五日の小除目に、十歳にして丹波守となつて時人を驚かせた藤原忠隆(北家)などとくらべると、敦光の生涯は不遇であつたといえよう。しかし、一般の文人とくらべて敦光がとくに不遇であつたとすることはできない。父明衡も兄敦基も正四位下で世を終つている。令義解に「従五位〇上階 大学頭。正六位〇下階 大学助 大学博士。」「正五位〇下階 七省大輔。従五位〇下階 七省少輔。」(二中歴・職原鈔にも同様の記載がある)とあるのを見れば、敦光の官位が低きにすぎるとは思われない。しかも明衡に「青雲欲絕空孤陋。皇沢難單久陸沈。」(巻五)等の歎があり、敦基・敦光に同様の歎があるのは何故であらうか。

敦基の詩に「久携書帙隔榮路。只侍鳳銜仰聖恩。」(巻六)とあり、敦光の「上啓函簡所望事」の状に「独守閑素之儒職。

已隔榮分也。」とあるのは、儒職に携わることがすでに榮分を隔てていると意識されるような社会の存在を示している。当時の記録に儒職を雅職と称している例がみられるのも、尊敬の念のみ満された言葉とは必ずしも思われない。物語の類にもこうした社会がのぞいている。微官を歎く敦光等の心事もそこから考えられなくてはならない。敦光が他の文人達とくらべてさして不遇とは思われないということは、換言すれば榮分を隔てた文人の群がそこにあつたということである。

(上畧) 官途猶歎前程遠。人世漸知往事非。寄語斯時遊放士。鶴吟與尺莫空歸。(巻四・藤原宗光)

(上畧) 雙髮蹉跎衰暮裡。一生零落利那程。今陪此処佳遊席。才拙詞疎独耻情。(巻五・中原広俊)

(上畧) 白首齡衰慙鶴髮。緋衫位賤歎龍鍾。生涯徒暮無成士。萬事依違未遇逢。(巻五・惟宗孝言)

(上畧) 詩友交争傾豫北。官途零落失司南。寄言斯席鷹揚士。鶴髮衰翁獨有慙。(巻五・大江佐国)

など、不遇を歎く詩が、この文人の群から生まれてくる。修辭の常套と発想の類似から、表現にひそむ真実を詩的虚構と見なしてしまふのは危険である。

紀伊国守の兼任を願つた申文に、敦光は自らを「儒林之孤枝。詞花之凡卉也。」と称し、「雖有雲霄之志。已無吹噓之人。」とも記している。四歳にして父明衡と死別し、兄敦基

の養子として官界に出てゆかねばならなかつた(中右記・寛

治八・六・五参照)という個人的事情も、敦光の不遇を考え
る上に見逃すことはできないが、この個人的事情が無ければ
さらに恵まれた経歴が訪れたであろうとする確証はない。

兼官への関心……………藤原氏北家の政權独占のため中央に
志を得なかつた貴族達が経済的な安定をも願つて地方官の兼
任を志したことは、史家の指摘するところである。敦光がし
ばしば地方官の兼任を願ひ、また「去年春就外記勘文被任加
賀介。而頻成訴訟。申播磨伊与権守。任仰令任但馬守也。」
(永昌記・保安五・四・二)の一文にもみられるような強い
関心を示していることにも、同様な事情が考えられよう。

敦光の家計については、三十歳の時の作に「瓢飲屢空無寸
祿。傷哉水菽尙難酬。」(卷五)とあり、七十歳頃の作「初
冬述懷百韻」(統文粹卷一)に「心操逐時整。容姿隨歲枯。體
衰携几杖。船暮迫桑榆。貧賤誠懷耻。始終共失誼。悶襟聊且
慰。」とあり、度々の申文にも「曉水冷於顏飄身衰。則何羞
其飲。暮戶絕曇突。氣慙亦不堪其愛。」(桑樞(榆イ)家貧
而送卅五年。)などとあるのをみると、代々恵まれない家柄
を考えあわせて、豊かな状態にあつたとは思えない。江戸時
代の随筆桑楊庵一夕話に、敦光の生活をかなり豊かなように
えがいているのは信を置きがたい。

地方官兼任の願のうらに、上に述べたような事情のあるこ
とを思うと、その願がかなえられないことが敦光の不遇の意
識を深めたであろうとは容易に察せられる。

「友厭白屋去彌疎。」(卷四・藤原周光)「莫咲多年貧嗜道。」
(卷五・藤原茂明)「山門深處自忘貧」(卷十・菅原時登)など、
貧を歎く声が文人の群に聞かれるが、それは兼官への関心が
彼等に共通のものであつたことを思わせるのであり、しかも
その実現が本人の能力によりも外在的条件にかけられるよう
な社会であつたところに集團の不満が考えられるのである。

以上、敦光を主として、不遇の意識の誘因を考えてみた。
誘因がこの二つに止まるとは思われないが、文人達に共通する
ものとしてはこの二つが大きく浮びあがつてくる。

不遇の意識が生ずるのは、主体自身の意識である。「官位
への関心」「兼官への関心」という言葉もそのことを示して
いる。儒職が閑職であることを知り、舷を枕として道眼を味
う菜みを知れば、敦光の不満も和らげられたことであろう。敦
光の場合、そうした達観を許さない自負心が彼を苦しめてい
る。文学の道と家柄とに対する自負心——すなわち、「自餘
之儒誰有此功哉。」「他人之功不及十分之一。」「其中功効
勝他之者某一人也。」などの言葉にみられる文学の道に対す
る自負と、「先例雖下姓之者。被用才藝多任尙書。况敦光者
重代珥蟬之家。延久聖主御侍讀之男也。豈混凡流哉。」とい
う言葉によく示されている家柄に対する自負とがこれであ
る。この類の言葉は彼の詩文のはしばしに見られるが、その
結果が世に多くを求める期待となり、期待が裏切られること

から不遇の意識へとつながる。他人に先んじられることを著しく気にするような、また嫌う人々との同席をあらわに拒む（長秋記・長承二・六・二十七参照）ような性格——台記一本に「敦光雖非鴻儒之器。云々」の評がみられるようであるが、こうした性格と無縁の言葉とは思われぬ——が敦光の自負心をかなり際立たせているが、他の文人についても、不遇の意識を生ずる源に自負心が考えられるのである。

しかし、本朝無題詩十巻をうずめる文人達の不遇を歎く詩をみると、不遇の意識の誘因が内在的なものよりも外在的なものにより多くかかわっていることを認めねばならない。「請特蒙天恩因准先例被敘式家氏爵状」「請特蒙天恩因准先例敘京家氏爵状」（朝野群載巻四）を見ても知られる藤原氏北家の専権、また院政と武士勢力の擡頭とによる貴族社会そのものの衰え、社会に対する適応性を欠いた文人達が次第に沈んでゆく——そうした社会の存在がここに考えられるのである。

III 「現実隔絶」の場

榮分を隔てた文人達は、どのような場に慰めを求めていたのであろうか。

書懷題紙障

寸祿斗儲求豈得。生涯本自任浮沈。
願身遂識榮枯分。在世獨慵遊宦心。
晋桂當初難入手。吳桐何日遇知音。

一篇狂句一壺酒。箇裡時時足醉吟。（巻二）

と詠んだ藤原通憲が、「一篇狂句一壺酒。」の世界にも「身是浮雲栖物外。佛猶滿月致和南。」（巻十）の世界にも住し得ず、保元、平治の乱に不満の発散を計つたのは、現実に対処する行動的な一つの生き方であつた。あるいは法皇や武士の勢力につながつて榮達の道をはかるのも行動的な生き方であらう。しかし、それほどの行動性を持ち得ない多くの文人達が撰んだのは、不満にみちた現実から意識的に自己を隔絶し、現実によつて傷つけられることを免れしめるような場——「現実隔絶」の場を設定し、そこに生きることであつた。

この「現実隔絶」の場を形成するものとして、詩と酒と仏とが考えられる。

○酒

文苑独慚榮悴異。醉郷自識毀譽空。

唯歎恩愛及衝泌。屢侍花筵陋巷躬。（巻四）

坐望羈遊簾自卷。臥思生計枕空歎。

秘書官冷沈塵巷。暫為忘憂傾酒卮。（巻九）

等の作が敦光にある。「暫忘自憂酒滿罍。」（巻四）「暫為忘憂斟桂酒。」（巻四）等、酒によつて憂を忘れようとするのである。酒を楽しむこと、文学の営みが酒とふかく結びついていることは中国にも我が国にも先蹤がある。しかし、「酌酒言詩」の類の詩が本朝無題詩に多くみられることは、酒による

忘憂が当時の文人の「現実隔絶」の場を形成していたことを示すものである。

当時、僧侶達の間に愛酒の風があつたことは、天承元年（一一三一）敦光が記した「延暦寺起請」（朝野群載卷三）、長治元年（一一〇四）僧侶某の手になる「起請酒事」（三十五人集）などからも知られる。当時の僧侶の綱紀の乱れから推せば驚くに当たらないが、飲酒が「誠是作十惡之根本。破五戒之刀矛。」（起請酒事）であることは確かである。本朝無題詩に「暫忘禁戒酒方酣。」（卷八・惟宗孝言）「暫忘禁戒十分酒。」（卷九・中原廣俊）「酒忘梵戒酌溪南。」（卷九・全上）「緝雖禁戒欲斟醪。」（卷十・全上）「還慙禁戒醉中眠。」（卷十・藤原周光）などの句が見られるのは、文人達の心の仏教への傾きを示すとともに、その信仰心が敢て酒を斥ける一途さに欠けていたことをも示している。五十歳以後は「身持齋戒。口誦妙偈。禁酒及色。断葷又娼。」（卷五）と譴えられる生き方をした三善為康のような人もあつたのであるから、酒・仏とも心ひかれた文人達にはこの点についての妥協があつたのである。

〇仏（仏教）

「延暦寺起請」の末文に「若然則現世誇賜紫之榮。當生（世イ）證蓮蓬之果。云云」とあるのは、敦光において出世間の志向と世間的志向とがさりげなく共存しているのを示しているが、そうしたあらわれは他にも見得る。

微官猶趁朝市裡。浮遊未隱暮山南。
蕭條原野望雖隔。近取戸庭子細語。（卷六）

閑水流年難却老。銜峯殘月足觀空。
何日未作山林士。官學無成僚劍翁。（卷八）

暫臥山雲餘喘休。被牽微官未淹留。
鬢寒五十餘廻雪。眼盡三千世界秋。

老樹漸疎疎霜後葉。生涯易過晚來流。
垢塵難拂罪根積。唯禮金仙低白頭。（卷九）

等の敦光の詩には、彼岸をのぞむ出世間の志向と此岸にひかれる世間的志向の纏れがある。この纏れは、「將脫響櫻歸野澤。忝滯（憑イ）聖化跡猶留。」（卷二）「元自安閑雖適性。須歸帝里仰皇恩。」（卷六）等と詠じている明衡やその他の文人達の持ちつづけたものでもある。出世間の志向が時に昂揚するにしても、現世的なつながりを全く断ちきるにいたらない。不遇の意識が自負心に導かれ、自負心は現世的なものへの執着とからみあつているから、不遇を歎く文人達の出世間の志向が多くの場合に決定的な力を欠いていたことは自然である。敦光は天養元年四月廿日病によつて出家、十月廿八日に歿したが、本朝新修往生伝には、その歿するや彩雲室を掩う奇祥を示したと記し、また敦光一生の間深く仏法を信じ法華経を転読すること二千部に及び造仏写経は記すに遑がないとも記している。些か溢美の言であることを免れないようである。敦光五十四歳の時の作「蓋天十二時銘并序」（続文粹卷

十一)に「余台嶠訪道。法水問津。」とあり仏法への潜心を見ることができ、とくに七十三歳以後は申文なども書かず——単に資料の散佚といつたことではあるまい——仏法への帰依が深まつているようで、

梵宮高敞隔塵寰。筋力雖衰纔得攀。

先遇仙翁丹竈洞。統談禪客白雲山。

月斜半夜鐘聲裏。霜老八旬鬢色間。

專礼千華台上佛。心憑引淚淚先潛。(卷十)

などの作には老境の心事をうかがいうる。しかし、「唯慙齡滿八旬算。仕官途未得休。」(卷五)「八十餘廻殘喘少。更來此砌又何期。」(卷十)「可似八旬愚老質。明時恩隔送居諸。」(卷二)などの句をみると仏教の三昧境に住し得てゐるとは言いがたく、病による出家という慣習的な機会を待たなくては素懷を遂げ得なかつた所以もこゝにある。家職のきづな、現世的なつながりを捨て得なかつた敦光、その姿は他の文人の姿でもあつたと考えられる。保延六年(一一四〇)、敦光七十八歳の時、北面の武士佐藤義清は遁世して西行と名をかえた。「家富年若。心無愁。」(台記)と言われながら二十三歳にして世を捨てた西行と八十を越えてなお出家し得なかつた敦光と、生き方のはげしさということを考えさせるのである。

次に文人達の仏教への帰依が、とくに「空観」につなぎとめられている点を考えてみたい。

春尋齋寺扣柴荆。引步禪庭竹杖聲。
遠水岸晴空草色。故山溪暗只松聲。
觀身自悟人間夢。垂老漸忘世上榮。

柱史素為朝市飢。嶺雲莫厭有浮名。(卷八)

適尋古寺到城東。終日惜春恨豈窮。

俗慮不侵觀念底。浮生易暮刹那中。

鬢邊蓬冷暗迎老。眼界花飛便悟空。

獨有幹林思惠澤。每看枝葉我心恫。(卷八)

こうした敦光の詩は空観に支えられている。そこでは、「萬慮皆空觀月坐。百憂暫斷與雲來。」(卷八・敦光)の句によく見られるように、「空」の観想が忘憂のはたらきを果す。「心在空門齡已老。須辭俗境脫簪纓。」(卷八・藤原季綱)「從師自學空門法。不奈俗間駁毀譽。」(卷十・藤原周光)「談僧漸識幽玄理。不恨人間官祿微。」(卷八・藤原敦宗)「五欲皆消觀念曉。百年半暮自由中。」(卷十・藤原基俊)など、空観の幅広い流れを辿ることができ、本朝無題詩に「空」「空観」の語が俗界・俗境・俗間・毀譽・塵慮・塵事・塵勞・塵妄などの言葉としばしば対置され、また浮生・浮命・浮名・浮榮の語が好んで用いられていることを思いあわせると、こうした空観が「現実隔絶」の意識の支えになつてゐることが知られる。ただ、空諦の義を観することは、その裡に「行」を予想するのであるが、文人達の「現実隔絶」の意識の支えとなつたのが主として「観」の面であつたこと

は、詩酒とのむすびつきを考える上にも、また上掲の詩句にもみられる——「洞裏煙霞從可樂。一生何必在臯州。」（卷十・源時綱）をこゝに挙げたいと思うが——莊老の思想の流れを考える上にも見逃すことができない。

○詩（文学）

藤原敦光が家職である文学の道に励んだことは言うまでもない。三十二歳の時の釈奠に講師となつて以来（中右記）、彼の生涯はこの道にかけられた。「某齡在幼日憶繼儒風。專慕移孝為忠之義。深勵嗜學立身之心。夙興晏寢。眼徒疲痛。冒暑凌寒。手不捨書卷。」（統文粹卷六）と述懐しているが、儒職の家に生まれて典籍に埋もれ読書に励み、「書厨」とさえ呼ばれたという。周易・左傳・毛詩・礼記・論語・孝經・史記・後漢書・文選等に造詣深く、命をうけて詔勅・宣命・頌文・祝頌文・告文・勸文等の作製にあたり、「凡當時文章銘贊。必使敦光草之。」（大日本史料伝）と記されている。生涯その手になつた文筆詩句は概二十合に満ちたとも言う。（往生伝）家職としての文学、——「唯嗜文学而為立身之計。將抽忠勤而表事君之誠。」（統文粹卷六）と自ら記しているような文学、そうした文学は精勵されるべきものであり、そのことから生ずる自負が、かえつて不遇の意識をたかめるものでもある。「文路何堪迷寸歩。官途獨隔從繁機。」（卷四）「林鹿野禽憐我否。獨疲文路暮齡頽。」（卷八）などにみる、人をして疲れさせ、報いられることのない空しさ

からくる失意に沈ませる文学である。文人の群から、そうした文学の道に倦んだ声が洩れる。詩の表現に多少の謙讓の意を汲むにしても、官界における地位とむすびついているような文学が人々を現実から隔絶してくれるはたらきを持たないことは明かである。「現実隔絶」の場を与えてくれる文学は別にある。敦光の詩に「官冷久為朝市隱。閑中嗜學自拋他。」（卷三）とあるが、この句が「終宵對月入詩魔。」の句と応じているのを見ると、ここにいう「学」が上に述べたような文学に限定されるとは考えられない。「文路何堪迷寸歩。」に對して「閑誦藻篇倚竹扉。」とあり、「螢窓倦學貪風月。」（卷四）を承けて「憊憶莊周齊物理。獨携氏養生論。」とあるのなどを見ると、自己を疲らせ倦ませる文学とは別に、詩があり、莊老の文学があり、さらに言えばそうした限定をはなれて、余裕ある、自放的な、「閑放之心」を養う文学があることを知るのである。大学の教科には文選なども含まれている以上、詩が家職としての儒學と拘りなくあるというのである、主体の意識において家職としての文学と區別されるような文学が、あるいは詩となり、あるいは莊老の思想を湛えた文学となつてあらわれることを言うのである。かくて文学も、「老後適交華席末。含毫一夜暫忘憂。」（卷三・惟宗孝言）の句にみるように、忘憂のはたらきを有してくる。

晩年、敦光が仏教に心をひそめていることはすでに述べたが、その頃「余則七旬而詞華春（瘠）廢。何遊於經書之林。」

(統文粹卷三)「敦光身老風月之筵。久疲儒學。」(統文粹卷六)と記しているのは、世間的志向の薄らぎが家職としての文学に対する関心の薄らぎを招いていることを示している。開放の心を養う文学がこれに代る。文学への関心が宗教感情の動きにつれて揺れるのである。開放の文学が老境においてのみ存するというのではないが、多分に老年的性格を有するものであるとは考えられよう。こうした文学に占める荘老の思想の位置については今は触れない。

以上、詩・酒・仏の三者について、その忘憂のはたらきを有すること、「現実隔絶」の場となりうることを考えた。三者の他に「琴」も同様のはたらきを持つ。弟明暹が笛の上手であつたというが、敦光にも琴を弾じて憂を遣る詩が少くない。詩・酒・仏の三者に琴を加えれば、「愛琴愛酒愛詩。」の詩人白居易の姿が色濃くでて、その影響を思う上での便もある。しかし、琴酒はしばしば一つの場に共存し、またひろく文人達について言うにはやゝ特殊にすぎるといふ点で、ことさらに「琴」は指摘しないことにする。

平安時代末期の文人達が求めたのは、詩・酒・仏三者の結びつきの上に形成される「現実隔絶」の場であつた。三者が内在させている背反性についてはすでに触れたが、「暗妨空観詩後思。還慙禁戒醉中眠。」(巻十・藤原周光)「萬般不染獨稠念。唯有詩魔未得降。」(巻八・藤原季綱)などはその

背反性につき當つてゐる。つき当りながら、なお詩が生まれるのは三者の調和された場があることを示す。詩・酒・仏の結びつきを可能にさせるものは三者自体の中にあるのである。背反性を意識しながらも調和させて受けとる、その受けとり方の中にある。そうした調和は、つきつめた思念の果に得られるよりもむしろ気分的な妥協の上にも求められる調和であつて、前稿で風流的調和と呼んだものである。こうした調和に文人としての立場がみられる。

詩・酒・仏の風流的調和に形成される「現実隔絶」の場、それは榮分を隔てた人々だけのものではない。「忘憂」といふ、その憂にも諸相がある。ただ、こうした「現実隔絶」の場が、政治面から押しつけられた文人達によつて愛され、育てられていつたところに時代の特色が見られるのである。

III 勸学会の流れ

上に見てきたような「現実隔絶」の場が平安時代末期の文人達のものとなる先蹤として、勸学会の存在が考えられる。勸学会を成立させたのは、文人達の宗教的情熱であつた。

「宗教的情熱」という言葉に重みがかけられるのはもとよりだが、「文人達の」という言葉にも劣らぬ重みがかけられねばならない。会の主導精神となつた狂言綺語観が法華信仰と白氏讚歎の情に出ているからである。勸学会のこの性格は、ここにいう「現実隔絶」の場に投影している。「詩境未抛口

業因。」(巻九・藤原敦光)「詩是狂言題石上。」(巻九・中原廣俊)「口業唯披釈部書。」(巻四・藤原周光)「詩應口業情猶動。」(巻十・全上)「水洗暮年口業塵。」(巻九・全上)「宿禰難癒詩是業。」(巻六・大江佐国)「詩慙口業老年魂。」(巻八・藤原知房)「戲論狂言皆口業。翻之爭作善詞。」(巻五・釋蓮禪)「禪侶真言偏綺侶(語イ)。結縁皆是善根人。」(巻八・大江匡房)など、そのあらわれである。

勸学会が藤原敦宗の頃まで維持されていることを前稿に記したが、敦宗の歿した天永二年(一一一一)六波羅密寺で勸学会が催されている(中右記)。中原廣俊・惟宗孝言・藤原敦宗・大江匡房等本朝無題詩の作者達が勸学会に参じたことのあるのは明かで、式部少輔・大学頭などの参会する例(勸学会之記・朝野群載卷三)から推して、敦光などもまた参会の機を有したのであろう。本朝無題詩には「秋日六波羅密寺言志」(巻九・敦光)等、勸学会での作かと思われるものも少くない。

かく見てくると、平安時代末期の文人達が生きた「現実隔絶」の場が勸学会の流れをうけていることは疑いを容れないであろう。ただ、ここに会の変容が辿られることは見逃しがたい。群書類従所収の本朝無題詩十巻を通じて「勸学会」の名が全く見出されないのは、偶然のことのようにであるが、この変容を暗示している。勸学会そのものの歴史の裡にすでに

迎られることであるが、緇二十口素二十人からなる限られた構成員、三月九月の十五日という定期を有する会としてでなく、酒と詩とそれをつゝむ仏教的観想を弊囲気として愛する人々の集いにひろがり、それがやがて個人ひとりびとりにとつても「現実隔絶」の場となりえたのであろう。初期の勸学会にも「現実隔絶」の場としての意味は求められなくはない。しかし、そこには文学と仏教との背反にむけられる懷疑が根を下ろしている。詩・酒・仏の風流的調和からは、そうした懷疑は起り得ない。狂言綺語という言葉の迫力を失つた使用、勸韻など修辭技法の盛行——閑放の文学はこのことと無縁でない——が、狂言綺語観の觀念的継承とその固着とを示している。勸学会は、その讀仏言詩の場がこうした「現実隔絶」の場とすりかえられることによつて、終焉への歩みを早めていつたのである。

狂言綺語観が、漢文学の領野において、より展開せしめられることになつた原因は、以上に述べたようなところにあるからであろう。これに比べると、和歌文学においてはさらに活潑な狂言綺語観の受容が為されているが、この点についての考察は別の機会を得て記したいと思う。